

<学術論文>

「杜家立成雜書要略」第一紙の書法分析 —「樂毅論」との比較から—

小林比出代 信州大学学術研究院教育学系

キーワード：杜家立成，光明皇后，樂毅論，王羲之，臨書

1. はじめに

「杜家立成雜書要略」¹は、東大寺正倉院に伝存する、光明皇后筆の書簡の模範文例集である。「杜家立成」の書儀としての特徴等に関しては、内藤虎次郎（湖南）「正倉院尊藏二舊鈔本に就きて」（1922）を初めとして、今日まで諸文献²で論じられてきている。当該論文での見解や論議をふまえて、「杜家立成」を包括的に概説した知見³を以下に引用する。

「「知故」すなわち友人間で取り交わされる手紙の模範文例集で、三六件七二通の往復書簡の文例を収めている。著者は都の杜氏の出身のもので、説がわかれているが、杜正倫またはその兄の杜正蔵と推定されている。本書は中国ではすでに散失し、伝存しないものの、わが国の東大寺正倉院に正倉院宝物として伝わる一本が現存する唯一のものである。」

一方、「杜家立成」は書の名品ともされている。文献での記述の一例⁴を示す。

「（「杜家立成」は、稿者注）臨書の樂毅論と相並んで皇后の御書としてのみならず、奈良時代の書道の代表的名蹟と称してよいであろう。」

このように、書作品としての「杜家立成」は、「正倉院の書蹟中の白眉と称してよい」⁵とされる「樂毅論」と並び称されてきている。しかし、実際のところ、現代における「杜家立成」の書作品としての評価は、「樂毅論」の陰に隠れてしまう感が否めない。光明皇后筆との説が有力である正倉院伝存の「樂毅論」は、王羲之筆「樂毅論」の臨書とされる。

「わが書道史上の遺品で、臨書といえる遺墨となると、まず、正倉院宝物の光明皇后御筆「樂毅論」がある。（中略）これは、まがうかたなき皇后の真跡である。」⁶

と述べる小松氏は、「臨書」について、「手本を傍らに置いて、これを熟覧しながら丁寧に写していく方法」と定義している⁷。王羲之筆「樂毅論」を臨書したとされる光明皇后が「杜家立成」を書写するにあたり、例えば以下の疑問点が考えられる。○光明皇后は自身が王羲之筆「樂毅論」を臨書したのと同様、自ら書写した「杜家立成」を人に臨書させる気概があったか。○光明皇后が「杜家立成」を書写することには、本書巻に、手紙文例の提示のみならず、書の手本としての意義づけも持たせるとの意図が存したか。○「杜家立成」に王羲之書法はどのように影響しているか。それは、光明皇后個人としての手習いの域に留まるものか。それとも、書簡模範文例集としての活用とともに、社会一般で中国書法の模範である王羲之書法を学ぶための、手習いの基盤としての意義をも意識したものか。

このように、「杜家立成」の書の手本としての可能性を模索することによって、稿者は「杜家立成」の書作品としての魅力を改めて講究したいと考えるに至った。

以上をふまえて、本研究では、「杜家立成」における王羲之書法の影響を分析検証する。その第一弾として、本論考では、「杜家立成」第一紙⁸における書法の特徴を、王羲之筆「楽毅論」の臨書作品である光明皇后筆「楽毅論」との共通性から検討考察する。第一紙以降は、同じ「杜家立成」においても書体や書風に変化が起こることをふまえ、まずは、本書冒頭部の書法について検証を試みることにする。

本拙稿執筆に際して、日本書道史領域の論文体裁は縦書きが主流であるところ、特に「3」における考察対象文字の提示方法を勘案して横書きとした旨をご了承いただきたい。

2. 「杜家立成雑書要略」の概説 —先行研究に基づいて—

「杜家立成」の書法を分析するにあたり、本章では先行研究から「杜家立成」の概説をまとめる。なお、各引用部末尾に付した【数字）頁数】は本論考末に記した「文献」に対応する。また、文中下線部は、書道的な観点から稿者が着目した箇所（「※」参照）を示す。

2.1 「杜家立成雑書要略」概説 ※「杜家立成」=光明皇后の書蹟/書体や書風が中程で変化

○「立成」とは、「即座もしくは即刻にでき上がる。」という意味になろう。」【7）p.46】

○「杜家立成は、杜家立成雑書要略の簡稱であり、隋末唐初の杜氏兄弟（正玄・正藏・正倫）一家の文集の略抄なのであり、書簡についてのいわば模範文例集なのである。（中略）それは、一はわが日本にのみただ断簡として残つて正倉院の秘笈に藏せられて来たのであり、一は中國本土においては全く逸失してその残缺が辛うじて邊地に見出されているのである。」【7）p.50】

○「雑書要略とは雑事に關する書簡の大要を掲げた著述の意であろう。」【8）p.158】

○「正倉院に現藏される『杜家立成雑書要略』一卷は、（中略）古来、光明皇后の書蹟として著名であり、書道史上貴重な作品として、多くの先学によって論ぜられてきた。」【10）p.1】

○「（中略）『杜家立成』は、およそ隋末の仁寿（601）の頃から、唐太宗初年の貞觀元年（627）の頃までの往復書簡を集め、書簡文範たらしむべくまとめられたものと思われ、これまさにわが推古朝、聖徳太子摂政時代に重なる時代に相当する。」【10）p.5】

○「おそらく、『杜家立成』も隋末唐初の間に簇出した書儀類の一類として成立し、初唐の頃に、民間の実用的書簡文の速成文範として、一般に利用されていたものであろう。それは「立成」の字義通り、「立ちどころに成る」書簡文範として、おそらく広範な支持を受け、（中略）高麗・百濟にも伝えられ、やがてわが国にも伝えられたものと思われる。（中略）

正倉院に現存する光明皇后筆『杜家立成』は、光明皇后が原本を忠実に書写したという条件の下にはあるが、太宗即位（627）以前に成れるものと考えべきであろう。」【10）pp.5-6】

○「（前略）『杜家立成』は杜氏の手になる即席書簡文範であろうが、子細に三六条の往復書簡の内容・表現を検討すると、以下のような点をその特質として指摘できる。

- 1 三六条がいずれも往復二通で一セットとなっていること。——全三六条の往復書簡に必ず表題が付され（中略），往簡に対して必ず（ママ）復簡（答）が付されている。したがって書簡数としてはすべてで七二通。（中略）書簡文範として実用性が高かったものと思われる。
- 2 その表現は概して四字句を中心にした対句表現が多く，またいずれも比較的短章で，趣旨を要領よく相手に伝えることを目的とした文章となっている。
- 3 書簡文の常用語（中略）が多く見られ，特に文末部は一定の形式をもって結ばれ，また（中略）相手に報謝する意の常套語の頻用が目立つ。
- 4 故事もしばしば四字句の対句として用いられているが，中にはかなり難解で，現代ではその出典なども判然としないものもある。

以上を通じていえることは，本書簡のそれぞれが，短章でありながらよく趣旨を相手に伝えるものとなっていて，招待・貸借・勧誘・送別・見舞・祝儀・謝絶・存問等々，一般人の日常生活においてしばしば必要とされる書簡文範を大略網羅しているということであるが，同時に，実用的書簡文でありながら，その表現は，かなりよく練られた四字句中心の文体で構成されていて，実用的目的以上に文芸作品として見ても模範的な文章として，当代の本邦人に歓迎されたものと思われる。

（中略）わが国人が，簡にして要を得た実用的書簡文範として利用するには，やはり『杜家立成』のようなものの方がはるかに利用し易かった筈である。」[10] p. 6-7]

○「（前略）『杜家立成』も，憶良らが唐土において入手し，（その入手した原本は，唐初頃の書写にかかるもので，太宗諱の避諱欠筆はまだ行われていず，勿論則天文字もまだなかった頃のものであった），帰国に際してもたらしたものと推定したい。

（中略）将来後直ちに宮廷に入り，当時宮廷貴族らに珍重され書写されたものと思しく，『杜家立成』はその将来原本は失われたが，光明皇后書写本が正倉院に伝えられて現在に至っているものと思われる。」[10] p.17]

○「（前略）初めは行書で中ほどから独草体風を交えて書写されており，」[12] p.201]

○「（※「杜家立成」は，稿者注）遣唐使派遣によってもたらされたと考えてよいであろう。」[12] p.228]

○「天平勝宝八年（七五六）五月二日，五十六歳をもって崩御した聖武太上天皇の大葬時に，多数の副葬品とともに『杜家立成』唐将来本も佐保山陵に埋葬されたのではないか。その大葬は，同月十九日，その日を目ざして光明皇后によって急ぎ臨書されたのが現存する正倉院本であり，その故に，はじめはかなり整然とした行書体，中ほどからは書写を急いだ風でやや乱雑な独草体の書風となったものと思われる。生前夫の聖武が鐘愛していた『杜家立成』唐将来本を副葬品に加えることを思い立ち，埋納後その面影を偲ばんがために妻の光明子が大葬直前の短期間に自ら急ぎ行った書写であったのではあるまいか。事情は，「国家珍宝帳」に記載される他の書巻「頭寺陀碑文」「樂毅論」などの場合も全く同様で，いずれも初唐の名だたる書家の手になる原本が将来され，聖武天皇は生前それを鐘愛

鑑賞していたので、それらを副葬品として埋納することとし、その記念品として、また前述のように習書用の手本として残すために光明子によって書写されたと解すべきであろう。」 [12] pp.240-241]

○「光明皇后の書の作として「樂毅論」は奈良時代を代表する作としてよく知られている。また今回述べようとする「杜家立成」は其の名は知られてはいるが、書家の手本としては見なされておらず、書道史的にはまだほとんど研究がされていない。しかし「杜家立成」は書儀といった模範文例集としては重宝されたのであり、光明皇后に止まらず、日本の文芸史、書道史を考える上でも重要な存在である。」 [19] p. 8]

○「（「杜家立成」とは、稿者注）すぐさまに出来る杜家が作った文例集ということである。（中略）要するにこの三人兄弟は文章、礼儀に明るく、秦王李世民、後の唐の太宗に厚く信任されていた存在であることが分かるのである。

そして『杜家立成雑書要略』の内容と役割であるが、基本的には、文例のマニュアル本で、三十六件、往復七十二通の書簡文例が載せられている。普段の交際の中で使えそうな文例を手際よく載せていると言える。（中略）基本的には駢文の流れをくむ文言的な書簡文例集と言った内容である。ただ中国では日用書簡文例集であったが、四字句を中心とした駢文的構成であるために、日本ではかなり文芸性の高いもの、高度な書簡文学として歓迎されたのではないかと想像される。」 [19] p.13]

○「（前略）光明皇后筆の『杜家立成雑書要略』の書き方を見て行くと、書き始めはともかくも、三葉以後、崩されて草書の書き方になってゆき、興に載ったような書き方をしている。おそらく光明皇后は『杜家立成』の内容を理解して、その内容が面白くてついつい引き込まれて書いたのではないかと推察されるのである。同じく光明皇后筆の「樂毅論」は短いせいもあり、全編謹厳に書写しているが、『立成』は長いので、しかも内容が面白く、書き進むにつれて興に乗って書いたと見受けられるので、光明皇后の漢文の理解力は相当高かったと想像される。」 [19] p.13]

○「（中略）『雑書要略』の書写者として褚遂良を想定してもおかしくないという予想がある（中略）。起居注に関して、杜正倫と褚遂良は関係が深いのである。（中略）杜正倫と褚遂良はほとんど同じ文化圏と言うより、同じ生活圏で生活していたのである。（中略）智永に師事して書を学んだ虞世南と欧陽詢の亡き後は、褚遂良が弘文館で学生たちに書を教えていたと歴史的に考えられるので、光明皇后が書写した「杜家立成」の原本は、あるいは、というより恐らく、褚遂良臨本の可能性が高いのである。おそらく褚遂良は王羲之の書の鑑定に当たるだけでなく、書の教科書として、各種の書写テキストを整備したと考えられるからである。」 [19] pp.14-15]

○「同卷子本は本紙縦 26.8～27.2cm，全長 706cm，軸長 30.6cm，白灰黄紅椽褐碧等の色麻紙十九帳を貼り繼ぐ形を取る。書體は、初めの方にとりわけ顯著なのだが、行書、ただし後の部分には草書も交える。」 [20] pp.37-38]

○「この『杜家立成雑書要略』は、正倉院のみに残り、他には全く知られることがなかつ

たため、日本古代社会において利用価値や需要が低かった、あるいは宮廷に秘藏されていて一般に普及することがなかった、などと考えられてきた。しかし 1998 年、宮城縣市川橋遺跡から、この『杜家立成雜書要略』を記した習書木簡が出土して、これまでの考えは大きく変更する必要が生じた。

市川橋遺跡は、陸奥國府多賀城の南に広がる官人たちの居住区で、木簡はその地区の河川跡の奈良時代の層位から発見された。このことは、『杜家立成雜書要略』が多賀城勤務の官人層に普及していたことを示す。

(中略) 木簡の書は、光明皇后筆の『杜家立成雜書要略』とは風貌がやや異なり、固い。が、1 字ずつ丁寧に書寫したと見え、これが手本を忠實に臨書しようとしたものであることをうかがわせる。正倉院の『杜家立成雜書要略』と比べると、このわずかなうちにも文字の異同があり、(中略) おそらく寫本が異なっていたものと思われる。」[21] p.127]

○『杜家立成雜書要略』もまた、書と同時に、書簡文例集としての役割も果たしていたことは間違いない。

實際、『杜家立成雜書要略』の用語・表現が、日本の文學、とくに『萬葉集』に及ぼした影響については、小島憲之氏をはじめとする考察があり、巻5の山上憶良と大伴旅人との書簡文學ともいべきジャンルの發生は、『杜家立成雜書要略』が契機になっているとされている。」[21] p.128]

○「古代日本の社会においては、中國的な身分秩序は形成されておらず、唐の「書」文化を享受していたのは、官人層に限られた。光明皇后や多賀城の官人の書寫された『杜家立成雜書要略』は、王羲之の書法(法書)・書簡や月儀と同様に、中國の「書」文化を象徴する優れた書の手本として、普及していたのである。同時に杜氏の文章は7・8世紀の東アジアにおいて、規範として廣く普及しており、日本の『杜家立成雜書要略』の受容もそうした東アジア世界の文化動向に沿ったものであったといえる。[21] p.130]

2.2 「杜家立成雜書要略」と光明皇后筆「樂毅論」との関係性 ※第一紙と「樂毅論」の類似性

○「光明皇后の御書は筆力雄強氣體茂密にして、同じ御筆にて正倉院に存する樂毅論と同一の法なり。積善藤家の印あり。蓋し六朝隋唐の書儀は、徒らに其名を存して、其體式をも知るに由なかりしもの、今此書が書帖に載せられたる月儀と共に、當時書疏の體を徴すべき資料たるは、甚だ有益なることにて、特に光明皇后の宸筆なるが故に貴きのみにはあらざるなり。」[1] p.64]

○「杜家立成一卷はかの有名な樂毅論と、ともに光明皇后の御書である。東大寺獻物帳には次の如くに載せてゐる。

頭陀寺碑文並杜家立成一卷	麻紙紫檀軸標綺帶
樂毅論一卷	白麻紙瑪瑙軸紫紙標綺帶
右二卷平城宮御宇皇太后御書	

(中略) 原本は白、黄、赤、茶、藍等の色麻紙十九張を繼いで書いたもので、用紙美はしく、其の書の筆力遒勁なると映帶して書道の神品をもつて目すべく、これに對すれば天平

の皇后の御面目、髣髴として千歳後に景仰し奉ることができる。(中略)

抑々我國歴代の女性中最も能書の者を求むれば、先づ光明皇后に指を屈しなければならぬ。千歳後に於てこれ丈大部の一卷及び樂毅論を併せ見ることを得るのは誠に有難いことである。世間で或は樂毅論は後の眞蹟なるも、この書は疑はしとなす者があるが少しく書を解する者であれば兩者同筆なることは思慮を費さずして明かなることである。」[3) pp.20-21]

○「光明皇后の樂毅論は、天平十六年十月三日と其の巻尾におかきになつてある(中略)、この年、四十四歳であらせられる。杜家立成は年月が無いけれども、恐らくは樂毅論より以後のものかと思われる。これは樂毅論の書風に、前に言つた筆者の知れぬ王勃集詩序の書風を加味したようなものであるが、兎も角此の二巻とも皇后中年以後の御書であるから、その筆意の奔放自由であるのは、其の爲めであつて、(以下略)」[4) p.9]

○「光明皇后は、正倉院に王羲之の書巻が數多く尊藏されていたこと、および樂毅論を臨書されていることなどから想像しても、かならず聖武天皇と同じく王書をよく學ばれたに相違ない。この書巻(※「杜家立成雜書要略」稿者注)も王羲之の尺牘、ことに御物の喪亂帖に見るとき筆意が十分にうかがわれることは見逃せぬことである。そしてこの書巻のすぐれているところは、こういう王書の筆致に唐人の行草の高い氣象が加わつて、その上に皇后の美しい理智のかがやきが添えられた點にあると思われる。第一紙はほとんど樂毅論と變りはないが、第二紙からは筆勢が暢達してさらに圓熟し、最後の一紙の部分に到つて、もつとも秀抜の極致に達しているように見られる。」[8) p.159]

○「(※光明皇后の「樂毅論」「杜家立成雜書要略」は、稿者注)ともに中国に原本が伝来せず、筆者の明らかなこの時代の書蹟として、珍重されるべきものであろう。」[18) p.29]

○「第一紙は「樂毅論」と同じように楷書であり、やや硬さが見られる。しかし、それはほんの一部であり、第二篇の終焉辺りから肩の力が抜けた行書になっていく。筆の性質を十分熟知した上での、線の肥瘦による書表現は見事の一言に尽きる。途中行間が狭く、字粒が細くなる箇所があるもの、巻末は紙面余白の関係からか、終焉が近づいたという心のゆとりからか、おおらかな雰囲気で書かれているのも見逃せない。ただ残念なことに、巻末には微細な傷みがあり、文字が部分的に欠損している。通覧した時には、さして問題にはなるまい。このように一卷を通して起承転結があり、鑑賞するもの、学書するものを飽きさせない。

一瞥してわかるとおり、一般的に横画は細く、縦画は太いという特徴を持つ。場合によっては、線が途中で抜けてしまつたり、逆に線が肉太で骨芯が見られなかつたりするようなものまであり、極端な温度差があるといえる。王羲之書法を自分のものとしているが、「樂毅論」とともに、とても女流の書とは思えない迫力がある。光明皇后の性格もあるいは、男勝りのところがあつたのではないだろうか。」[18) p.30]

○「光明皇后の書道史的名品としては「樂毅論」がよく知られ、日本の書道史の初期の楷書の代表作とされる。そしてこの『杜家立成雜書要略』を比較してみると、はじめの一、

二葉は、ほとんど同じ楷書の筆致である。三葉あたりから崩されて草書になって行くが、それから考えて、これは光明皇后が、ある手本を見ながら臨書していると考えられるのである。」[19] p.9-10]

○「まず「杜家立成」の書き出しの部分と「樂毅論」の筆跡は極めてよく似ていることが指摘できる。恐らく同じ系統の手本を学んでいることが推量される。」[19] p.11]

○「頭陀寺碑文」も『樂毅論』も優れた書として珍重されたものであり、光明皇后はこれを忠實に臨書したのである。その「頭陀寺碑文」と合綴された『杜家立成雜書要略』もまた書の手本として臨書されたと考えるのが自然であろう。

通常、『杜家立成雜書要略』の筆致は、王羲之の書を臨書したとされる『樂毅論』に比べて、自由な運筆であると言われる。しかし上質な色麻紙に書かれた華麗な装飾は、これが鑑賞用の書であることを示し、丁寧な行書體で書き始め、後にゆくほど草書風に變化するその姿も本来の原本を忠實に臨書したものではないかと思う。」[21] p.127]

2.3 光明皇后の書及び光明皇后筆「樂毅論」 ※光明皇后独自の書風の特徴

○「光明皇后の樂毅論は、(中略)その奔放に行りたまいし筆致は、拜觀者の昔より驚歎し奉る所(以下略)。」[4] p.9]

○「本文と藤三娘の署名は同筆と見られるので、この巻は光明皇后が晋の王羲之の樂毅論をみずから臨書されたものと思われ、皇后の學書の一端をうかがうことができる。」[8] p.159]

○「この書は極めて虔しい態度で臨書されたもので、筆意の眞率さにはまず感を打たれるものがある。筆力は雄健で、原本もむかし陶弘景が「筆力は鮮眉、紙墨は精新」と評し、また褚遂良が「筆勢は精妙、楷則を備盡す」と稱したごときものであつたであろう。筆法の屈折し頓挫する中にはよく古法がうかがわれる。また陶弘景が「勁利にして甚しく意を用うるに非ず」といつている言葉にも通じ、巧妙さを超脱したうちにおのずから高潔な精神をたたえている。久しく鑑賞してもあくことのない美しさがあり、あわせて皇后の高い教養と温かい佛心と崇高な人格もしのばれる。」[8] p.160]

○「(※光明皇后の、稿者注)真筆の「樂毅論」は、王羲之の「樂毅論」の臨書であるが、その個性的な勁拔さは、皇后の気性を象徴している。」[11] p.285]

○「なお、光明皇后がなぜ杜家立成を書いたのかについては、関係する資料もなく、不明という他はないのであるが、推論だけを記すると、その一は、おそらく唐土将来原本の初唐書風の習得と、この書風の後世への伝達を目的とするものであつたのだろうと考えられる。それは、現存する光明皇后筆の正倉院本が、まことに闊達雄渾な書風を伝え、またその料紙も華麗に染色された上質の麻紙を用いていて、『杜家立成』はこのころ(天平末期)には書簡範例としてよりもむしろ習書の手本として用いられていたのではないか、と思われせられる点からの推定である。おそらく行・草体の一字一字は、かなり忠実に原本の風韻を伝えていると見てよいであろう。」[12] p.240]

○「本巻(※光明皇后筆「樂毅論」稿者注)は舶載された王羲之書法の臨書と考えられているが、加えて皇后独特の品位と気魄のこもった書風が醸し出されている。」[13] p.90]

○「(中略) この臨書にみられる人にぶっつけていくような感じは、「樂毅論」の文章の内容までも表現する力をもっていたことを想わせる。」[17] p.247]

○「「樂毅論」は一見して分かるように、女性が書いたとは思えない力強さ、鋭さがある。しかも細太、曲直、始筆の多様さなど複雑な変化に富み、行書的な用筆を交えながら、生き生きと書かれている。また文字構成は、扁平なものを基調とし、大小、方向、疎密、余白の取り方など、実に様々な変化をみせている。そうした変化をもち、バランスによって文字が成り立っているため、字形は整っているというよりも、むしろいびつな感じを受ける。

用筆は上から筆を垂直におろし、穂先を紙に突き刺すように書かれている。始筆の角度、終筆の止め、鋭いはね、払い、転折のアクセントなど、これらすべてが「樂毅論」全体の強さに結びついているといえるだろう。」[17] p.247]

○「光明皇后の『杜家立成』は聖武天皇の『雑集』と共に、ある意味では両方とも俗字による行・草体の習書だと言ってよかろう。」[25] p.78]

2.4 光明皇后筆「樂毅論」と王羲之書法 ※二つの「樂毅論」の特徴／王書の奈良朝における盛行

○皇后の樂毅論は支那の集帖類で伝えられている樂毅論から見れば、遙に骨力があつて、昔の人が王羲之の書を雄強と評した事によく當つておるので、餘程よい羲之の手本をお用いになつたことと想像される。今日では、臨書ではあつても、支那の集帖よりは此の光明皇后の御書の方が、王羲之の筆法を考えるのには、遙に役に立つ程のものである。」[4] p.9]

○「(※「樂毅論」⁹の、稿者注) その表紙、即ち獻物帳に紫紙標とあるものであるが、その端に、見紛うことなき奈良朝時代の筆蹟を以て「紫薇中臺御書」と書かれている。(中略) 「紫薇中臺御書」とは、即ち光明皇后の御書という意味で、この樂毅論は、光明皇后の御手蹟であること、全く疑いないのである。」[5] p.81]

○「この樂毅論は、光明皇后が王羲之の書と伝えられる樂毅論を御臨書になさつたものである。それは王羲之の書と伝えられる樂毅論と、その行款字数がすべて一致することによつて確實である。(中略) これが王羲之のものを御臨書になつたものであることは、寸毫も疑う餘地がない。そして、その筆法も王羲之のそれに似ているのである (以下略)。」[5] pp. 83-84]

○「王羲之の何代かの子孫に當る隋の智永といふ書法の達人は、この樂毅論を以て、正書第一と折紙をつけていた(以下略)。やはり樂毅論が第一であるというのが定評となつている。(中略) 今日、われわれの普通見得るところの、いろんな法帖に摹刻せられている王羲之の樂毅論は、何しろ展轉うつしうつし伝えられてきたものであるから、王羲之の眞面目を必ずしも正確に伝えていたとはいひ難いのであつて、その點からいうと、光明皇后の樂毅論は、今日われわれの見得る限り、もつともよく王羲之の眞面目を伝えているものであるといつて、少しも憚らないのである。そして、今日では、却てこの光明皇后の樂毅論を以て、いろんな法帖に摹刻せられている王羲之の樂毅論の價値を批判する基準となるのである。」[5] p.84]

○「光明皇后の樂毅論は、その用筆極めて遒勁で、一寸拜觀した所では、これが御女性の

方の御手蹟かと疑われる位であるが、元來王羲之の樂毅論が、そういうものであつたらしく、古人に、王羲之の樂毅論を見ると、劔をぬいて躍りだしたくなると言つた人がある（中略）。何にしても光明皇后の樂毅論は、絶世の墨寶である。」[5] p.85]

○（※王羲之筆「樂毅論」は、稿者注）王書の楷書では古來もつとも重んぜられているものである。（中略）この兩本（※元祐祕閣本と餘清齋本、稿者注）をこの書卷（※光明皇后筆「樂毅論」稿者注）に比較すると、行欵は一致し、書體もほぼ同じく、どちらかといえば餘清齋本の方がこれに近い。[8] pp.159-160]

【参考】「内藤湖南博士によれば、これ（※光明皇后筆「樂毅論」稿者注）と『余清齋帖』（中略）に収める王羲之の「樂毅論」との比較においてその忠実な臨書であろうという（以下略）。」[15] pp.144-145]

○「本紙（※「樂毅論」稿者注）は全面に裏側からへらのようなもので空野を引いた、いわゆる縦簾紙であり、書写にあたっての配置に大きな助けを成したと思われる。奈良時代の宮廷に王羲之書法が盛行したことを物語る貴重な書道史の資料でもある。」[13] p.90]

○「（前略）いま正倉院宝物として伝えられる光明皇后の「樂毅論」は、すこぶる注目に価する。これは、今日現存する王羲之の法帖「樂毅論」と比較すると、字体の結構が、まったく軌を一にするもので、皇后がみずから忠実に臨書したことが明らかとなる。[15] p.31]

○「（前略）王羲之筆「樂毅論」の方は温雅で気品があり、「静」の美が感じられる。一方、光明皇后筆「樂毅論」の方は臨書作品と思えないくらいの迫力、「動」があり、个性的で力強く書かれている。」[17] p.243]

○「（前略）当時（※天平年間、稿者注）は王羲之の書が大流行していた。光明皇后が王羲之の「樂毅論」を臨書していたことは、奈良時代において王羲之の書がよく学ばれていたことを示す良い例であろう。（中略）王羲之が手師としてもっとも尊重されたのは、能書家として優れていて、唐で尊重されていたからだけでなく、その書風が日本でも好まれたからだ。（中略）このように王羲之の書は、奈良・平安期にわたって日本書道の骨格づくりに大きく寄与したのである。」[17] p.244]

○「王羲之の「樂毅論」を見てみるといずれの文字も整然と位置しているが、各行の字数を考えてみると、一行十七文字が最も多く、十六字であったり、また十八字であったりして一定ではない。ところが光明皇后の場合は字が大きくなったり小さくなったり、字間が空いたり詰まったりとさまざまである。とくに十七行目の「四」字などは、完全に書く場所がないところを、王羲之書と配字を同じにするために、むりやり押し込んでいる。また十八行目では「主之」とするところを順序を誤って「之主」としてしまい、「レ」をつけて正している。このような仕上がりからいって、光明皇后の「樂毅論」は何度も練習を重ねて書き上げたものではなく、むしろ一枚限りのぶっつけ書きと見なしてよいだろう。[17] p.246]

○「光明皇后もまた王羲之の「樂毅論」を臨書しているが、行間、字の大きさ、あるいは配字などに乱れがあつて完璧なものでない。また臨書する際には、かなり形の把握に苦し

んだようである。もっとも王羲之の書を臨書した時点で、光明皇后の技量と見識が初心の域にあったとは考えられないが、王羲之の完璧ともいえる書にとまどいを感じながら、その筆意に体当たりしての臨書であると思われる。そしてそれらを越えて、強烈な個性が見るものをひきつけて飽かすことがない。」[17] p.250]

○「楽毅論」といえば、書聖・王羲之のものが知られている。羲之の楷書作品の中で最も評価が高く、隋の智永は正書第一と称し、唐の太宗は哀惜のあまり、「蘭亭序」とともに墓の中まで持っていったという逸話もあるくらいである。(中略)(※「余清齋本」は、稿者注)他の刻本に比べて筆の動きがよく見え、光明皇后が臨書した「楽毅論」と用筆が相似していることから、かなり信の置けるものとされている。(中略)本書に多少の異同はあるが、光明皇后の書は、筆意をよく会得した臨書といわれている。

おそらく筆は、正倉院に伝来するような雀頭筆で、製法から分類していうならば巻筆であろう。(中略)巻筆の鋒先の微妙なタッチが筆線に変化を与えているのであろう。(中略)空野のところで線質が変化するのは、孫過庭の「書譜」の折筆を彷彿とさせるものがある。」[18] p.29]

○「同時に東大寺に獻納された同じく光明皇后筆の『楽毅論』は、王羲之の楷書の忠實な模本を手本に臨書したものとされている。文章そのものも名文として知られるが、この書は王羲之が息子の王獻之に與えた書の手本とされ、釋智永(中略)は、その「題右軍楽毅論後」(『法書要録』所收)で、「楽毅論者正書第一、梁世模出、天下珍之」と評している。」[21] p.126]

○「もちろん孫過庭(648?-703?)がその書論『書譜』の中で、王羲之の書がなぜ優れているのかについて述べて、「寫樂毅則情多佛鬱(樂毅を寫せば則ち情は佛鬱多く)」といい、文章の内容からその文章が書かれた背景・環境について感應できるからだと言っているように、優れた書はその内容と相俟って情感の自然な發露をうながす。[21] p.128]

2.5「杜家立成雜書要略」への王羲之書法の影響 ※王書の「杜家立成」及び奈良朝への影響力

○「正倉院の御物中、文書の類を除いて専ら書法として取扱う可きものは左の数種である。

聖武天皇宸翰雜集

光明皇后御書樂毅論

同 杜家立成雜書要略

王勃集詩序 (中略)

此等は先づ正倉院御物の書法の代表的と見られるものであるが、其の外に、東瀛珠光の第四卷第二百十一に「臨書」と題しておるものがあつて、其れが即ち王羲之の書を臨書したものである。

是に依つて考えて見ると、正倉院に存し、若くは曾て存していた書法類の大部分は皆王羲之の系統に属するものである(中略)。」[4] p. 8]

○「光明皇后は王羲之の樂毅論を臨書せられたものがあるので、王羲之の書法を學ばれたことが明白であり、又其の御書の杜家立成も矢張り樂毅論風の書である。」[4] p. 9]

○「この杜家立成雜書要略略稱して杜家立成は、王羲之の書風に卓拔された光明皇后の書蹟として、本邦書道史研究上貴重な資料である（以下略）。」[6] p.42]

○「（「樂毅論」の、稿者注）本文と署名は同筆であり、これが羲之の樂毅論の臨書であることは疑うべくもなく、（中略）筆勢極めて勁健で、筆意の奔放自在なることなど、雄強と稱せられる王羲之の極致を臨寫せられ、その眞に近いものといえよう。（中略）

杜家立成は詳しくは杜家立成雜書要略といい、書簡文例集ともいべきもの。（中略）この書はさらに筆力自由奔放、他に比類なく、年月は記されていないが恐らく樂毅論より後の書と思われる。この皇后の書二巻は臨書とはいえ、羲之の書法を究明するに絶好な資料である。」[8] p.29]

○「現に正倉院に傳え、またかつてここに存していた書法および書蹟の大部分が羲之の系統に属するものであることは疑い得ないところである。これを考えるとき、前代に取入れられた健豪にして野趣に満ちた中國北方の書風よりも、南方に起つた寛厚悠揚の趣が深い、優雅な羲之の書を、わが天平人がこよなく尊重し、かつ競つてこの書風を模倣したことを知ることができよう。（中略）そこにはこの温雅な書風が時人の趣向に合致したことも看過することができない。萬葉集に羲之（羲之）と書いて、これをてしと讀んでいることもその盛行を思わしめ、その書風は後代わが書道に大きい影響を及ぼし、その黄金時代を醸成する素因となった。」[8] p.30]

○「そして、この木簡（※市川橋遺跡から出土した習書木簡、稿者注）の書と正倉院の『杜家立成雜書要略』の書は、この典籍が書の手本として普及していたことを推測させる。王羲之の書法や「月儀帖」に属する存在だったというであろう。王羲之の書法もその多くは尺牘・書簡であり、正倉院文書にも王羲之の書状を習書したのものがあることはよく知られていよう。王羲之の書が、8世紀の日本において書の手本として廣く流布していたことは、夙に多く論じられているところである。書の名手による書簡は、それ自體が藝術作品であり、先進的な唐の文化を象徴する、崇拜と憧憬の對象であつたのだと思う。」[21] p.127]

2.6 「杜家立成雜書要略」への王羲之書法以外の影響 ※「杜家立成」の原本は褚遂良筆との見解

○「兎も角、大體此の天皇皇后ともに王羲之を學ばれたことは明かであるが、皇后の御書に残つている王勃詩序の書風は、之は王羲之風とはやゝ異なるもので、支那に於て唐初に行われた歐陽詢等の風を傳へておるかと思われる。歐陽詢の書は、今日では多く楷書のみ傳わつて、行草書は至つて少いけれども、矢張り支那の集帖のうちに僅かに存しておる處から考えると、王勃詩序の書と類似した點があるように思われる。日本では、王（マ）陽詢並びにその子歐陽通の書風が、白鳳頃から天平の初期の間位まで盛に行われた（以下略）。」[4] p.9]

○「我が天平時代、即ち彼の國の玄宗の頃は、支那でも王羲之書風の全盛の時代であるから、自然それが大いなる影響を我邦の書風に及ぼし、光明皇后の御書なども、王羲之風に併せてそれ以前から行われていた歐陽詢などの書法と相合したのである。」[4] p.11]

○「ここに興味のある問題は、（中略）書道史上における光明皇后の眞蹟の性格に對して多少の繋がりをも有していることである。即ち杜正倫は、（中略）虞世南（中略）などとも政事

を論じている(中略)。一方、杜家立成は、すでにも觸れたように光明皇后の眞蹟として有名であるが、書道史上、その勁い筆致は、よく皇后の御氣象のほどを示している、といわれており、それは王羲之に學んでいるからである、とは、いわば、斯界の定評である、といえよう。同じく皇后の筆である、という樂毅論は、人も知るように、實に羲之のそれを臨書したものなのである。(中略) 智永はもちろん僧であるが虞世南のまた佛教に關係にあつたことは明らかで、(中略)。わが光明皇后のまた熱心な佛徒であつたことは、今更にいうまでもないわけで、かくて想うに、こうした信仰の點においても、彼此の間には或る共通な風格もしくは影響をもっているのでは無かろうか。」[7) p.49]

○「(前略) 顧野王・智永に就いて書を學んだ虞世南亡き後は褚遂良が弘文館學徒の爲に手本を書いたと考えられよう。

以上のような杜正倫と褚遂良の關係から見てくると、あるいは光明皇后の書寫された『杜家立成』の原本は、王羲之の書風を体した褚遂良の手によるものではなかつたかと考えるのもあながち牽強付会の説ではなかろう。」[12) p.211]

○「ただこの「杜家立成」は光明皇后の書の方面における、創作品かという、恐らくそうではなく、臨書であると云う方が正確であろう。誰の書の臨書かと速断することは出来ないが、「樂毅論」も「杜家立成」も褚遂良の書風に酷似していることは、書のある程度學んだ人であれば推察がつくであろう。褚遂良と断定できなくとも、おそらく王羲之系統の拓本または双鉤填墨本の臨書と考えられるので、オリジナルなものの存在が想定できる。」

[19) p. 8]

○「(中略) 私は王羲之は唐では褚遂良によって、宋では米芾によって、元では趙孟頫によって再生が謀られたと考えているし、中国書道史は王羲之という傳統派とそれの對抗軸のせめぎ合いの歴史と見て良いとも考えている。そして傳統派には書聖という偶像が必要であつたし、その偶像を保持するためには、再生は必要不可欠ともいえるが、逆に再生されることで、偶像は新たな命を吹き込まれて生きてきたと言える。日本の書道史の初期に当たって、中国から將來された書籍は貴重で影響力を持ったであろうが、其の書の手本は、王羲之の名の下に、實際は褚遂良であつたと言つても過言ではないと思われる。傳統再生に果した褚遂良の役割は大きかつたし、日本に於いても王羲之崇拜の基礎を築いたと言える。光明皇后『杜家立成雜書要略』からだけでも、初期の日本書道史は伝王羲之の書跡によって形成されたと言えるであろう。」[19) p.15]

2.7 「杜家立成雜書要略」＝俗書」との見解 ※唐土の俗書を日本で高度な文芸書として受容

○「東大寺獻物帳には「頭陀寺碑文并杜家立成一卷」とあるが、東瀛珠光第一輯の杜家立成の解説では、この「并」字の横に「樂毅論」と書いた附箋が貼られてゐることを記録してゐる。この朱書の附箋を松島順正氏は注意して、「頭陀寺碑文并樂毅論杜家立成」と讀むのが正しく、(中略) もとく三文書合せ一卷をなしたものが、頭陀寺碑文と樂毅論が紫羅の標と共に逸したものであるとされる。(中略) この三文書が同一の卷子に収められてゐることが問題であらう。樂毅論は、(中略) 晋の王羲之がこれを書いたものが傳摸され、隋から

唐にかけて正書の第一として重んぜられ、書家の榻摸本として有名なものであった。また頭陀寺碑文は南朝齊梁の間の王巾の作った名文で（中略）文詞の巧麗を以て世に重んぜられたといふ。（中略）光明皇后は唐の榻摸本によつて樂毅論を臨寫され（中略）たが、頭陀寺碑文は恐らくは文選によつて書かれたのではと思ふ。ところが、この二の文章に比べると、杜家立成は全く性格の異なつた唐土では問題にされぬやうな俗書であった。（中略）このやうな俗書を樂毅論や頭陀寺碑文と並べておられる所に、問題があるのである。（中略）ただ敦煌の俗書の中には、かういふ例が數多く見られる。或はかういふ種類の俗書が若干奈良朝に舶載されてゐて、皇后は書寫の形式を、唐土傳來の俗文書に倣はれたのではなからうかと疑つてゐる。（中略）光明皇后は側近にすばらしい學者を御持ちであつたわけである。とすると、このやうな學者の影響を受けられた皇后が、なぜ杜家立成のやうな俗書を樂毅論や頭陀寺碑文と同列視されたのであらうか。當時の我國では大陸文化流入の速度も見て明らかなやうに、唐文化攝取に急なあまり、新しく舶載されたものは、唐土ではあまり問題にされぬやうな俗書であつても、實用書として珍重して、正当な書とそれほど嚴重に區別しなかつたのであらう。杜家立成も、右のやうな事情で、光明皇后の御眼にとまつて筆寫されたものであらう。」〔6〕pp.50-51〕

○『杜家立成』は、実は唐土にあってはまさに日用書簡文範であつたものと思われるが、さきにも記したやうに、四字句を中心とした、かなり文芸性の高いもので、わが国人にとっては、高度な書簡文学として歓迎されたのではないか、と思われる。唐土における俗書が、わが国では高級な文芸書として迎えられた例を、ここにも適用することができるのではあるまいか。」〔10〕p.16〕

○「おそらく、わが使節一行は、新しい唐土の文化を全身で吸収することにつとめ、長安・洛陽の間にあつて、広く庶民の間に流布していた通俗書にも眼を配って入手したものと思われる。それらの俗書の中には『遊仙窟』や『瑠玉集』のごときもあり、更に『杜家立成』も加えられていたものと思われる。」〔10〕p.18〕

3. 「杜家立成雜書要略」第一紙の書法上の特徴 —光明皇后筆「樂毅論」との共通性—

本章では、先行研究¹⁰を基に、光明皇后筆「樂毅論」の書法上の特徴を具体的に列挙し、「杜家立成」第一紙に書寫された考察対象文字 211 字と比較検証する。以下、それぞれの特徴につき、左枠内には先行研究¹⁰で掲げている「樂毅論」での文字例を、右マス目内には「杜家立成」でその特徴を顕著に表している文字を提示する。

〈字形について〉

①横長で扁平な字形

- (ア) 横に広がる字形：「樂毅論」の主画となる横長の横画が緊密に組み立てられて、字形が扁平になる。（隸書の遺意がある。）
- (イ) 縦に伸びる字形：横広い字形だけではなく縦に伸びる字形がある。（作品に明るさが生まれる。）

① (ア) 以方樂放者	聖	蕭	希	陪	醜	① (イ) 事義為	瑟	簾	幕	灑	舉
	何	樂	人	散	謹		典	拂	其	屈	行
	相	率	馳	傳	無		勞	性	蒙	高	許
	孰	知	若	斯	是		使	事	孟	耕	衆
	先	藉	少	借	閑		螢	更	學	史	暫
	浴	疑	慙	謝	諸		損	夫	幸	忤	悞
					奉	歷	羣	經	淮		

②字形の不均衡と変化

: 点画の方向, 長短, 左右への中心移動, 扁と旁の位置移動等が定まった法則から外れる。

(筆意の働きの字形の不均衡と変化をもたらす。)

(ア) 横画の方向が一定でない

(イ) 下部を右に寄せる

② (ア) 霸討	書	持	再	性	生	② (イ) 齋春	嚴	寒	孟	學	審
	謹	無	已	甲	言		舊	冢	先	暫	奉
	暫	輕	事	幸	違		光				

(ウ) 旁を下げる

(エ) 右払いが長い

② (ウ) 侯務	故	領	即	行	忻	② (エ) 攻是	入	令	走	人	近
	斯	許	仰	勿			還	述	之	隨	送
							疑	違	奉	答	

(オ) 縦画が傾く

② (オ)	杜	書	聖	雪	蕭
	簾	店	行	近	傳
	盃	借	枯	待	穿

〈部分的な用筆法について〉

- ①画と横画の細太：横画が比較的細いのに対し、縦画は太い。
- ②横画 (ア) 左上より筆を滑らかに入れ、止めず一気に反る。
 (イ) 始筆をやや浅い角度で打ち込み、筆の弾力を利用して送筆し、終筆は高い筆圧で止めて返す (三折法)。
 (ウ) 気持ちのつながりをもって逆筆に入る。
- ③縦画：始筆はしっかり打ち込み、力が抜けないように筆の弾力を活かして送筆し、終筆は筆を止めて返す。

① 甲 盡 而 難	雜	書	聖	寒	奠	③ 節 即 ↓	雲	霏	巖	簾	酒
	持	其	悶	希	旨		其	因	在	負	相
	何	樂	得	士	當		參	還	述	耕	不
	深	此	無	螢	田		出	計	耳	弟	待
② 天 ア イ 害 ウ	杜	書	一	噉	故	動	爐	舉	奠	持	望
	其	遣	希	再	旨	陪	何	樂	得	穀	謹
	深	事	盃	無	就	借	省	耕	若	可	是
	先	耳	輕	滂	了	夫	幸	謝	年		

④はね：真横に入筆し，方向を変えて送筆した後，水平気味に長く鋭くはね出す。

⑤転折：横画の終筆部で一旦筆を浮かせ，改めて高い筆圧で筆を打ち込んだ後下方に向かう。

④ 事 則 	家	裳	蕭	動	向	⑤ 苟 明 	家	白	裳	簾	欲	
	拂	持	杯	行	遂		向	瀪	酒	寒	望	
	勞	蒙	何	榮	得		遣	願	勿	勞	台	
	事	傳	學	可	閑		呈	如	慮	當	馳	
	寫	了	為				傳	知	故	策	更	學
	謝	穿					閑	寫	違	當	弟	答

⑥左払い（ア）やや直筆的に送筆し，払いの途中で方向を変えて払う。

（イ）途中までまっすぐに送筆し，一気に曲げて真横に払う。

⑦右払い（ア）筆圧を加えて鋒を開き，力強く送筆し，長めに払う。

（イ）途中で二，三回方向を変化させながら送筆する。終筆で筆を払わずに返すものもある。（運筆におけるリズムの躍動が表れる。）

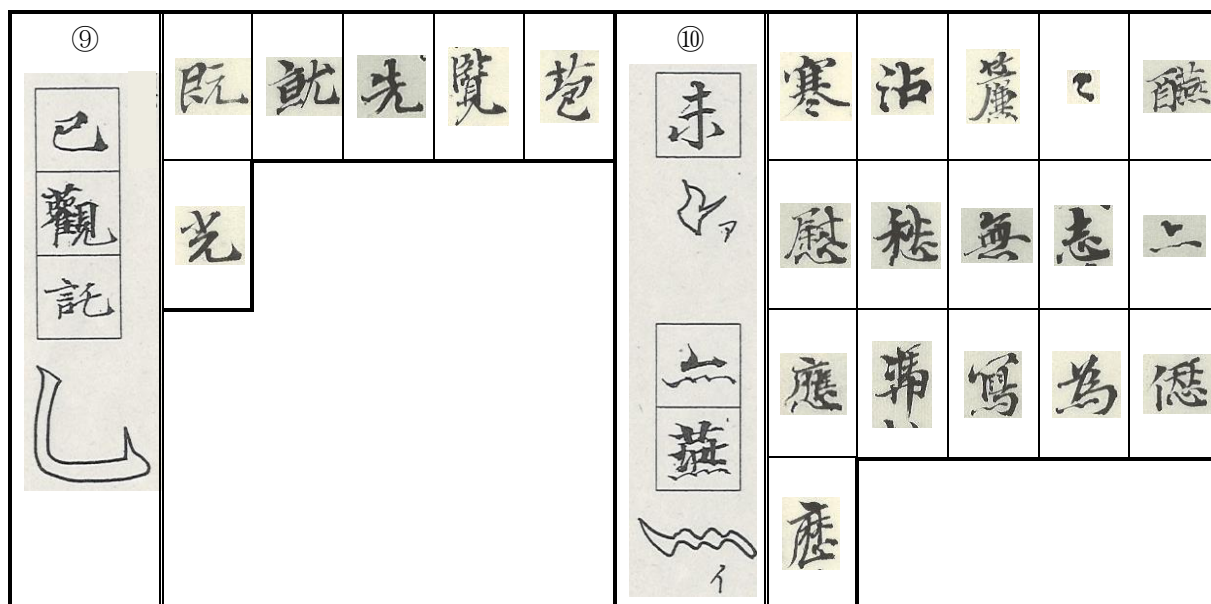
⑧反り：始筆でしっかり打ち込み，細くのびやかに送筆する。はねは右に筆を再度引いて上へ強く押し出す。

⑥ 大 尹 疑 	卷	飲	⑦ 夫 之 趣 	家	寒	入	遣	故	⑧ 幾 我 戴 	瑟	風
	店	使		令	走	遲	遂	使		飄	悶
	更	史		除	人	近	還	述		慰	愁
	有	未		久	更	敢	之	隨		慮	志
	奉	勿		送	未	疑	悞	奉		應	慥
				答	史						

⑨曲がり：始筆は鋭く打ち込み，送筆部は細く浮かせて，一気に方向を変えて曲がる。

⑩点（ア）大きくそらせて，強く突いてはねあげる。

（イ）烈火の場合，ほとんど連続して点が書かれ，行書的である。充分に筆を立てて紙面に食いこませるようにして書く。



先行研究で既述された光明皇后筆「樂毅論」の特徴に則り、「杜家立成」第一紙において各特徴を呈する文字を検証したところ，上記の通り，全ての特徴で相応数の該当文字が抽出された。また，光明皇后筆「樂毅論」と「杜家立成」第一紙での同文字（もしくは類似文字）の比較（【資料1】参照）からは，双方の字形及び筆法における共通性が認められる。

【資料1】光明皇后筆「樂毅論」[※上]と「杜家立成」第一紙[※下]の同一（もしくは類似）文字の比較

書	風	其	燕	樂	之	事	是	先	不	為	疑
書	風	其	醜	樂	之	事	是	先	不	為	疑

以上の結果から，「杜家立成」第一紙と光明皇后筆「樂毅論」は書法上多くの共通点を有し，その特徴は酷似すると考えられる。

4. 「杜家立成雜書要略」への王羲之書法の影響 —第一紙と「蘭亭序」との比較から—

「3」での結果を受け，本章では，「杜家立成」における王羲之書法の影響について，第一紙に焦点を絞り考察する。

「大小王眞蹟書一卷は，（中略）同獻物帳に「是奕世之傳珍」，「先帝の玩好」とあるごとく，聖武天皇が累世の珍寶として甚しく愛翫されたのみならず，皇后とともに學ばれたものと察せられ，當時羲之の眞蹟がいかにかに貴ばれていたかは想像に難くない。」¹¹と述べ

られる通り、奈良朝における王羲之書法の影響は大きい。「王羲之が書写した書跡が、南朝の梁代に模写され、ついで隋の智永が王羲之の書の中で第一番であると認定した書跡」であり、「王羲之の書としては最高であると認定されていた」¹²王羲之第一位の楷書作品「楽毅論」を光明皇后は臨書していた。光明皇后筆「楽毅論」は王羲之筆「楽毅論」の忠実な臨書作品とされる¹³。臨書は「書写者の心構え、態度、技能などの要素が大きく作用する」¹⁴ものである。光明皇后は王羲之の作品を臨書することで自らの書法の礎を築いたと考えられる。一方、見方を転換すれば、光明皇后は、当時の日本の社会に王羲之書法が広がることの一部を担ったと捉えることができる。奈良時代における王羲之書法の伝播は、光明皇后の王書への心服が相俟ったものと推察される。

光明皇后が王書を学び、王羲之書法の影響を受けていた証左は、「蘭亭序」と「杜家立成」第一紙の同文字（もしくは類似文字）の比較（【資料2】参照）からも認められる。

【資料2】「蘭亭序」[※上]と「杜家立成」第一紙[※下]の同一（もしくは類似）文字の比較

「杜家立成」第一紙は楷書を主とするが、【資料2】に示す通り、行書作品「蘭亭序」における同一の（もしくは類似する）文字との間に、字形及び筆法における共通点が存在する。本論考では光明皇后が「蘭亭序」を学んだか否かについて論証はしないが、皇后が「蘭亭序」を臨書していないにもかかわらず「杜家立成」に上記の共通性を有していたならば、このこと自身が光明皇后書法への王羲之書法の浸透を示すものと考えられる。

5. まとめと今後の課題

本論考での検証考察から、「杜家立成」第一紙と光明皇后筆「楽毅論」は書法上の特徴を同じくし、また、「杜家立成」第一紙の書法の源流には王羲之書法があると推考できる。ただし、この推論の確証を得るには、「杜家立成」第一紙と光明皇后筆「楽毅論」の類似字例に併せて相違する字例も提示し、各々を比較した上で両者の共通性を検討する必要がある。

奈良時代、中国から将来された文物書物は当時の日本の文化に大きな影響と恩恵を与え、現在想像している以上に日本を支配していた¹²と推察する。王羲之書法の影響はその一つであり、光明皇后筆「楽毅論」や「杜家立成」第一紙がその好例となる。今後は、「杜家立

成」第一紙以降の書法について、同じく王羲之書法からの影響を検証する。具体的には、小松氏が指摘する王羲之筆「喪乱帖」及び「孔侍中帖」との共通性¹³から考察を試みる。ただし、小松氏や大野氏が論述する通り、「奈良朝における書法の趨勢は、すべて唐朝のそれに支配されるもの」¹⁵であり、「王羲之は確実な直筆がない以上、実質は伝王羲之の書跡であり、唐の能書家の欧陽詢、褚遂良の果たした役割は想像以上に大きく、日本ではさらに大きな役割を果たしたと推察される」¹⁶のである。大野氏は、「王羲之の書は当時既に確実な直筆はなく、梁代の搨模本を以て最高としているのであるから、その鑑定に当たった褚遂良が唐代に於いて、梁代の模本をもとに唐代搨模本の作制に関わったことは大いに考えられる。」¹²と指摘する。先述の「喪乱帖」「孔侍中帖」はともに唐時代の模本で、精妙な双鉤填墨の技法を駆使しているが、これらも唐人の手によるものである¹³。「杜家立成」への王羲之書法の影響について考察する際は、王書を忠実に臨書し再現した唐朝期の書人、特に褚遂良の存在とその書法についても視野に入れる必要があるだろう。

先人が、「臨書」を通して、敬愛する古典作品と真摯かつ厳格に向き合った姿勢を念頭におきながら今後の考察にあたりたい。

謝 辞

本研究は JSPS 科研費 JP15H0515101 の助成を受けたものである。

文 献

- 1) 内藤虎次郎「正倉院尊藏二舊鈔本に就きて」
支那學社編輯『支那學』第三卷第一號 弘文堂書房 1922
- 2) 内藤湖南「正倉院尊藏二舊鈔本に就きて」『研幾小録』弘文堂書房 1928
- 3) 下中彌三郎編輯『光明皇后 杜家立成雜書要略』
(和漢名法帖選集, 続 第3卷) 平凡社 1933
- 4) 内藤湖南「正倉院の書道」小川晴暘編『正倉院の研究(上)』明和書院 1947
- 5) 神田喜一郎「光明皇后の御書 樂毅論について」
小川晴暘編『正倉院の研究(上)』明和書院 1947
- 6) 西野貞治「光明皇后筆の杜家立成をめぐって」『萬葉』第二十六號 萬葉學會 1958
- 7) 福井康順「正倉院御物「杜家立成」考」東方學會編『東方學』第17輯 東方學會 1958
- 8) 『書道全集』第9巻 日本1大和・奈良 平凡社 1965
- 9) 内藤虎次郎「正倉院尊藏二舊鈔本に就きて」『内藤湖南全集』第七巻 筑摩書房 1970
- 10) 蔵中進「正倉院蔵本『杜家立成』の本邦将来とその文学史的意義」
神戸市外国語大学研究会『神戸外大論叢』第38巻2号 1987
- 11) 西林昭一 杉村邦彦 浦野俊則編『歴代名家臨書集成 別巻・解説』柳原書店 1988
- 12) 日本文化交流史研究会『杜家立成雜書要略 注釈と研究』翰林書房 1994
- 13) 古谷稔「〔光明皇后筆樂毅論〕」『日本名筆選』36 光明皇后 空海 最澄集 二玄社 1995

- 14) 山川英彦「杜家立成雑書要略注補」
名古屋大學中國文學研究室編『名古屋大學中國語學文學論集』第10輯 1997
- 15) 小松茂美『小松茂美著作集』第十八卷 日本書道史展望 旺文社 1997
- 16) 小松茂美『小松茂美著作集』第十五卷 日本書流全史一 旺文社 1999
- 17) 山本佳代「光明皇后『樂毅論』の魅力」
九州女子大学国語国文学会編『語学と文学』(30) 2000
- 18) 高城弘一『樂毅論・杜家立成雑書要略 光明皇后』天来書院 2002
- 19) 大野修作「光明皇后『杜家立成』の原書写者は誰か ―日本奈良朝書道の基本―」
『書法漢學研究』第3号 アートライフ社 2008
- 20) 永田知之『『杜家立成雑書要略』初探 ―敦煌書儀等との比較を通して』
高田時雄編『敦煌寫本研究年報』第三號 京都大學人文科學研究所 2009
- 21) 丸山裕美子「敦煌寫本「月儀」「朋友書儀」と日本傳來『杜家立成雑書要略』
―東アジアの月儀・書儀― 土肥義和編『敦煌・吐魯番出土漢文文書の新研究』
東洋文庫 2009
- 22) 金文京『『杜家立成雑書要略』と唐代文学』中国文史研究会『中国文史論叢』2009
- 23) 西一夫『『杜家立成雑書要略』の書儀的性格 ―文体・表現・受容の観点から―』
第34回和漢比較文学学会発表資料 2015
- 24) 西一夫「正倉院蔵『杜家立成雑書要略』本文の配列 ―敦煌書儀との比較―」
第25回信州大学国語教育学会発表資料 2015
- 25) 馬駿『『杜家立成』における俗字の世界とその影響』
李銘敬・小峯和明編『日本文学の中の〈中国〉』勉誠出版 2016

1 以下、本書を「杜家立成」と略して示す。なお、『杜家立成雑書要略』は書卷であることから、本来は『』を用いるところだが、本論考では主に書作品としての見地から本書を考察するため「」を用いる。「樂毅論」に関しても同様とする。

2 文末の「文献」一覧を参照のこと。

3 西一夫「正倉院蔵『杜家立成雑書要略』本文の配列 ―敦煌書儀との比較―」第25回信州大学国語教育学会発表資料 2015 p.1

4 『書道全集』第9巻 日本1 大和・奈良 平凡社 1965 p.159

5 『書道全集』第9巻 日本1 大和・奈良 (前掲書) p.160

6 小松茂美『小松茂美著作集』第十五巻 日本書流全史一 旺文社 1999 p.143

7 小松茂美『小松茂美著作集』第十五巻 日本書流全史一 (前掲書) pp.135-136

8 本論考でいう「第一紙」とは、「杜家立成」における最初の紙継ぎのところ(1行目(題目行)から18行目)までを指す。

9 本論考では「樂毅論」との表記を用いるが、文献引用の際に注を付す場合は、各文献での表記に従い「樂毅論」との表記を用いる。

10 山本佳代「光明皇后『樂毅論』の魅力」九州女子大学国語国文学会編『語学と文学』(30) 2000

11 『書道全集』第9巻 日本1 大和・奈良 (前掲書) pp.29-30

12 大野修作「光明皇后『杜家立成』の原書写者は誰か ―日本奈良朝書道の基本―」『書法漢學研究』第3号 アートライフ社 2008 p.11

13 小松茂美『小松茂美著作集』第十五巻 日本書流全史一 (前掲書) p.144-145

14 小松茂美『小松茂美著作集』第十五巻 日本書流全史一 (前掲書) p.142

15 小松茂美『小松茂美著作集』第十八巻 日本書道史展望 旺文社 1997 pp.31-32

16 大野修作「光明皇后『杜家立成』の原書写者は誰か ―日本奈良朝書道の基本―」(前掲書) pp.12-13

(2016年12月 5日 受付)
(2017年 2月20日 受理)